

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	社会集団としての教派神道の展開に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	藤井麻央
Author(English)	Mao Fujii
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12299号, 授与年月日:2022年12月31日, 学位の種別:課程博士, 審査員:弓山 達也,上田 紀行,中島 岳志,中野 民夫,福留 真紀
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12299号, Conferred date:2022/12/31, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	要約
Type(English)	Outline

論文要約

社会集団としての教派神道の展開に関する研究

藤井麻央

本論文は、幕末維新期に生じた宗教が教派神道という宗教団体として成立し、社会集団の一つとして展開する過程に注目して当該宗教を分析する。黒住教、天理教、金光教に代表される幕末維新期に生じた宗教は、近代日本の宗教の特徴を示す事例として発生段階の思想を中心に解明が進められてきた。これに対して本論文は、継続段階における宗教の変容や継承を社会環境の中で捉えていくことで、近代日本の宗教団体の特徴を提示するものである。

宗教を構成する主要な要素として、信念、儀礼と並び集団や組織があり、集団内部に役割の分化が生じ、地位の体系をつくり出した組織化された集団が宗教団体と定義される。宗教団体は救済を可能とする宗教的権威の聖性を核としながら、社会との接点となる世俗的側面を有し、それゆえに団体の活動の自由度は行政に強く左右されることになる。幕末維新期に生じた宗教において宗教団体が生成される過程は、明治政府による新たな宗教政策が模索される時期であった。明治初期の教導職制を経て、管長制を梃に国家が間接的に教宗派を監督・統制する体制が近代宗教行政の基本となり、当該宗教はこの体制下で教派神道として宗教団体を生成することになった。草創期において近世本所による容認を得ながら講や道として緩やかな結びつきを成していた当該宗教は、教会制度により各地の信仰営為を規格化された地域拠点として整備して資格を有する教師を配置し、教会と教師を本部が一元管理する形態へと移行した。幕末維新期に生じた宗教の組織化は、明治政府の宗教政策・行政により促進されたことから、各地の教会により構成される教派という包括団体は教会と教師を管理する事務機能が期待される世俗的側面が強い。これは、性質の異なる宗教運動が教派神道となることで備えた共通の特徴であると析出した。

このような基本的性格を有する教派神道として成立した宗教団体に対して、宗教的意味が付与される動向もまた観察された。教派神道の先駆けとなった黒住教では、明治後期にかけて団体的形式が追求される中で、神道において乏しかった集団的概念を「教団」という言葉を導入して克服し、「教祖の道連の団体」である「黒住教教団」と自己規定した。一派独立の過程で管長の下での自治を可能とする諸機構を備えた金光教では、「取次」という救済形態に宗教団体としての原拠を据える過程で、教会制度にも宗教的意味を付与していき、教えと制度が相互作用していった。こうした幕末維新期に生じた宗教の継続段階における動向は、創始者の時代に存在せず、かつ、人為的につくられた事務機関にすぎない教派という包括団体に対して、聖性が充填されていき、事務機関から目的集団としての宗教団体に価値転換したことを示すものと分析し得る。本論文は、これを教派神道における「意味の革新」と位置づけた。金光教が「取次」という救済の業をめぐる目的集団としての宗教団体を強固なものとした近代における歩みは、教派神道体制という近代国家による制度を換骨奪胎する過程を象徴するものであった。このように近代日本の国家と宗教との関係性は、先行研究で指摘されてきたような抑圧や迎合と割り切れるものではなく、一方で管長制が敷かれるため自律しているともいえない。その中で、宗教は「巧みな」実践により国家による制度を流用して独自の価値を創出したのである。

以上の知見は、従来の教派神道の類型論を運動展開論へ架橋しながら、近代日本の宗教のうち教派神道体制と密接に関係した大小の宗教群を組織の特性から類型することを可能とする。これまで教派神道は発生基盤、思想、実践等に着眼しながら帰納的にその特徴が捉えられてきた。こうした生得的条件に加えて、継続段階における「意味の革新」の度合いを考慮することで、教派神道における類型間の移行の解明につながる。創唱性が高い宗教であっても地域の信仰営為を結集することは容易ではなく、集団の統合と目的集団としての自己規定が運動展開過程における課題となることを考慮すれば、「講・講社」から「教派神道」となり「神道系新宗教」に至るダイナミズムを捕捉し得る。

他方、戦後の状況に目を転じれば、宗教様式の変容が確認されるものの、戦前の教派神道体制下で生成された宗教団体の形態は各派において基本的に維持されている点に留意する必要がある。近代における国家と宗教との関係性の下、包括的集合体として宗教を把握する傾向が高まったことも考慮すれば、組織化が宗教の維持・継続に必要であることのみならず、教会制度と教師制度に支えられた集団の凝集の在り方の近代適合的な側面を見逃すことはできない。近代適合的でありながら教祖に仮託された目的集団としての宗教団体であるがゆえに、個人化が進む現代において組織宗教モデルが不適合を起こしているとされても、変革が容易ならざる葛藤に、幕末維新期に生じた宗教の今日的課題があるだろう。